第22回夏期福音特別集会（3）（鹿沢）
第二回伝道旅行
――使徒行伝第15～18章――

1975年8月23日
小池辰雄

同労者シラスとテモテ　ピリピ伝道　神の霊的な法則　救の霊震　テサロニケ伝道　アテネ伝道　神の中に生き動きまた在る　キリストの中に生き動き在る　焼けくそ信仰　ザ・ドラマ　コリント伝道・エペソ伝道　十字架と聖霊と復活　奥の現実　矛盾構造　御霊の愛　祈り

【使徒15】

35 斯てパウロとバルナバとは尚アンテオケに留まりて多くの人とともに主の御言を教え、かつ宣べ伝えたり。

36 数日の後パウロはバルナバに言う『いざ我らさきに主の御言を伝えし凡ての町にまた往きて兄弟たちを訪い、その安否を尋ねん。……

40 パウロはシラスを選び、兄弟たちより主の恩恵に委ねられて出で立ち、41 シリヤ、キリキヤを経て諸教会を堅うせり。

【使徒16】

1 斯てパウロ、デルベとルステラとに到りたるに、視よ、彼処にテモテと云う弟子あり、その母は信者なるユダヤ人にて、父はギリシヤ人なり。2 彼はルステラ、イコニオムの兄弟たちの中に令聞ある者なり。3 パウロかれの共に出で立つことを欲したれば、その辺に居るユダヤ人のために之に割礼を行えり、その父ギリシヤ人たるを凡ての人の知る故なり。4 斯て町々を経ゆきて、エルサレムに居る使徒・長老たちの定めし規を守らせんとて、之を人々に授けたり。5 ここに諸教会はその信仰を堅うせられ、人員日毎にいや増せり。

6 彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、7 ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、8 遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。9 パウロ夜、幻影を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。10 パウロこの幻影を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴かんと為り。

11 さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネ

アポリスにつき、12彼処よりピリピにゆく。ここはマケドニヤの中にて、この辺の第一の町にして殖民地なり、われら数日の間この町に留る。13安息日に町の門を出でて祈場あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、14テアテラの町の紫布の商人にして神を敬うルデヤと云う女きき居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。15彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯く強いて我らを留めたり。

16われら祈場に往く途中、卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女、われらに遇う。17彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高き神の僕にて汝らに救いの道を教うる者なり』18幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり

19然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』22群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、26俄に大いなる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。27獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』29獄守、燈火を求め、駆け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等よ、われ救われん為に何をなすべきか』31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32斯て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。……

【使徒17】

1斯てアムピポリス及びアポロニヤを経てテサロニケに到る。此処にユダヤ人の会堂ありたれば、2パウロは例のごとく彼らの中に入り、三つの

安息日にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明して、3キリストの必ず苦難をうけ、死人の中より甦えるべきことを述べ『わが汝らに伝うる此のイエスはキリストなり』と証せり。4その中のある人々および敬虔なる数多のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに従えり。5ここにユダヤ人ら嫉を起こして市の無頼者をかたらい、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を囲みしが、6見出さざれば、ヤソンと数人の兄弟とを町司たちの前に曳ききたり呼ばわりて言う『天下を顛覆したる彼の者ども此処にまで来れるを、7ヤソン迎え入れたり。この曹輩は皆カイザルの詔勅にそむき他にイエスと云う王ありと言う』8之をききて群衆と町司たちと心を騒がし、9保証を取りてヤソンと他の人々とを釈せり。……

16パウロ、アテネにて彼らを待ちおる間に、町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐く。17されば会堂にてはユダヤ人および敬虔なる人々と論じ、市場にては日々逢うところの者と論じたり。18斯てエピクロス派、並びにストア派の哲学者数人これと論じあい、或者らは言う『この囀る者なにを言わんとするか』或者らは言う『かれは異なる神々を伝うる者の如し』是はパウロがイエスと復活とを宣べたる故なり。19遂にパウロをアレオパゴスに連れ往きて言う『なんじが語るこの新しき教えの如何なるものなるを、我らの知り得べきか。20なんじ異なる事を我らの耳に入るるが故に、我らその何事たるを知らんと思うなり』21アテネ人も、彼処に住む旅人も、皆ただ新しき事を或は語り、あるいは聞きてのみ日を送りいたり。22パウロ、アレオパゴスの中に立ちて言う、

『アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬う心の篤きを見る。23われ汝らが拝むものを見つつ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出したり。然ば我なんじらが知らずして拝む所のものを汝らに示さん。24世界とその中のあらゆる物とを造り給いし神は、天地の主に在せば、手にて造れる宮に住み給わず。25みずから凡ての人に生命と息と万の物とを与え給えば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事うることを要し給わず。26一人よりして諸種の国人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限りと住居の界とを定め給えり。27これ人をして神を尋ねしめ、あるいは探りて見出す事あらしめん為なり。されど神は我等おのおのを離れ給うこと遠からず、28我らは神の中に生き、動きまた在るなり。汝らの詩人の中の或者どもも「我らは又その裔なり」と云える如し。29かく神の裔なれば、神を銀・金・石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思うべきにあらず。

30神はかかる無知の時代を見過しに為給いしが、今は何処にても凡ての人に悔改むべきことを告げたもう。31さきに立て給いし一人によりて義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり』

32人々、死人の復活をききて、或者は嘲笑いしが、或者は『われら復この事を汝に聞かん』と言えり。33ここにパウロ人々のなかを出で去る。34されど彼に付随いて信じたるものも数人あり。其の中にアレオパゴスの裁判人デオヌシオ及びダマリスと名づくる女あり、尚その他にもありき。

【使徒18】

1この後パウロ、アテネを離れてコリントに到り、2アクラと云うポントに生まれたるユダヤ人に遇う。クラウデオ、ユダヤ人にことごとくロマを退くべき命を下したるによりて、近頃その妻プリスキラと共にイタリヤより来りし者なり。3パウロ其の許に到りしに、同業なりしかば偕に居りて工をなせり。彼らの業は幕屋製造なり。4斯て安息日毎に会堂にて論じ、ユダヤ人とギリシヤ人とを勧む。

5シラスとテモテとマケドニヤより来りて後はパウロ専ら御言を宣ぶることに力め、イエスのキリストたることをユダヤ人に証せり。6然るに、彼ら之に逆い、かつ罵りたれば、パウロ衣を払いて言う『なんじらの血は汝らの首に帰すべし、我は潔よし、今より異邦人に往かん』7遂に此処を去りて神を敬うテテオ・ユストと云う人の家に到る。この家は会堂に隣れり。8会堂司クリスポその家族一同と共に主を信じ、また多くのコリント人も聴きて信じ、かつバプテスマを受けたり。9主は夜まぼろしの中にパウロに言い給う『おそるな、語れ、黙すな、10我なんじと偕にあり、誰をも汝を攻めて害う者なからん。此の町には多くの我が民あり』11斯てパウロ一年六个月ここに留まりて神の言を教えたり。……

18パウロなお久しく留まりてのち、兄弟たちに別れを告げ、プリスキラとアクラを伴い、シリヤに向かいて船出す。早くより誓願ありたれば、ケンクレヤにて髪を剃れり。19斯てエペソに著き、其処にこの二人を留めおき、自らは会堂に入りてユダヤ人と論ず。20人々かれに今暫く居らんことを請いたれど、肯んせずして、21別れをつげ『神の御意ならば復なんじらに返らん』と言いてエペソより船出し、22カイザリヤにつき、而してエルサレムに上り、教会の安否を問いてアンテオケに下り、……

●同労者シラスとテモテ

15章です。

35 **斯てパウロとバルナバとは尚アンテオケに留まりて多くの人とともに主の御言を教え、かつ宣べ伝えたり。**

大体これが50年の春らしいですが、数日の後、直ぐに出発にかかるのですから、大変なものです。

36 **数日の後パウロはバルナバに言う『いざ我らさきに主の御言を伝えし凡ての町にまた往きて兄弟たちを訪い（と）、その安否を尋ねん。……**

40 **パウロはシラスを選び、兄弟たちより主の恩恵に委ねられて出で立ち、**41 **シリヤ、キリキヤを経て諸教会を堅（かた）うせり。**

16章です。

1 **斯てパウロ、デルベとルステラとに到りたるに、視よ、彼処にテモテと云う弟子あり、その母は信者なるユダヤ人にて、父はギリシヤ人なり。**

「テモテ」はパウロが「わが子」という言い方をしているようなくらいに非常に親しい弟子となった。テモテ書簡があるとおりです。

2 **彼はルステラ、イコニオムの兄弟たちの中に令聞（よききこえ）ある者なり。**3 **パウロかれの共に出立つことを欲したれば、その辺（あたり）に居るユダヤ人のために之に割礼を行えり、その父ギリシヤ人たるを凡ての人の知る故なり。**

未信のユダヤ人のために、それを躓かせないために割礼を行った。パウロは純粋なユダヤ人であるが、教養はギリシア的な教養をもっている。ところが、テモテというのは血の上から両方をもっている。

4 **斯て町々を経ゆきて、エルサレムに居る使徒・長老たちの定め し規（のり）を守らせんとて、之を人々に授けたり。**5 **ここに諸教会はその信仰を堅うせられ、人員日毎にいや増せり。**

シラスとかテモテとかいうのは非常にパウロの同労者としてあずかって力があった。

6 **彼らアジヤにて御言を語ることを聖霊に禁ぜられたれば、フルギヤ及びガラテヤの地を経ゆきて、**7 **ムシヤに近づき、ビテニヤに往かんと試みたれど、イエスの御霊、許し給わず、**8 **遂にムシヤを過ぎてトロアスに下れり。**9 **パウロ夜、幻影（まぼろし）を見たるに、一人のマケドニヤ人あり、立ちて己を招き『マケドニヤに渡りて我らを助けよ』と言う。**

これは不思議なことですね。やはり、キリストの霊が、ちょうどパウロがバプテスマを受ける時にアナニヤに示したように、マケドニヤ人の或る人に示して、それを幻のうちにパウロに合わせたわけです。これはキリストが、「マケドニヤの方に伝道せよ」ということを具体的に一人の人を幻の中で遣わされたということです。

10 **パウロこの幻影（まぼろし）を見たれば、我らは神のマケドニヤ人に福音を宣べ伝えしむる為に我らを召し給うことと思い定めて、直ちにマケドニヤに赴（おもむ）かんと為（せ）り。**

ここで急に「我ら」という言い方になっている。学問的には10節以下を「我ら資料」と言っている。彼は伝道にはもちろん祈りつつ行きますから、いつもその先はどういうように行くということを示されるわけです。

●ピリピ伝道

11 **さてトロアスより船出して真直にはせてサモトラケにいたり、次の日ネアポリスにつき、12 彼処よりピリピにゆく。ここはマケドニヤの中にて、この辺の第一の町にして殖民地なり、われら数日の間この町に留る。**

ピリピは非常に親しい教会になる。パウロの為にいろいろ具体的に援助もすることになる。そこに送った書簡がピリピ書です。第三次伝道のその次に、第四次旅行でローマに連れていかれる。ローマで、このピリピ、エペソ、コロサイという手紙を書くことになる。

13 **安息日に町の門を出でて祈場（いのりば）あらんと思わるる河のほとりに往き、其処に坐して、集れる女たちに語りたれば、**

面白いことに、パウロがギリシアに入って最初に伝道した相手は女性であった。

14 **テアテラの町の紫布の商人（あきうど）にして神を敬うルデヤと云う女ききり居りしが、主その心をひらき謹みてパウロの語る言をきかしめ給う。**

面白い言い方ですね。神さまはこの女性の心を開いて聞かしめた、という。やはり祈りの人ですね。祈りの人でなければ、神さまの方からそういうことはなさらない。これは非常に印象的な話です。

15 **彼は己も家族もバプテスマを受けてのち、我らに勧めて言う『なんじら我を主の信者なりとせば、我が家に来りて留まれ』斯く強いて我らを留めたり。**

非常に伝道者たちを懇ろにもてなした。美しい劇的なひとつの場面です。

偉大な人物のお母さんは、ほとんど例外なしに魂の質がいい。魂の質がいいということは、御霊を受ければみんな魂の質はよくなる。生まれつきということをいわなくても。女性が歴史を、第二の国民をつくっていく。たとえ自分の肉の子供でなくても、第二の国民の霊的な母となる。アウグスティヌスにしろ、ルターにしろ、ゲーテにしろ、みんなお母さんが素晴らしい。日本は女子教育をもっとしっかりしなくてはいけない。女子教育をしっかりするためには、その教育者が魂の人でなければ、絶対にそれはできない。

ここにいらっしゃる女性の方はみんなもの凄い使命を持っている。第二の国民の本当に霊的な母となる責任と使命と光栄とを持っている。それだけのことは自覚していただきたい。それは楽しい。それは天界の歴史にはちゃんと映ってきます。

この地上の現実は煉獄です。煉獄の反映は、善きことは天に反映する。悪しき事は地獄に反映する。地獄の反映が大きいというと、地獄の鬼どもが慕うから、地獄の方に引っ張られる。それで地獄行きになる。ところが、天国に反映する生き方をしていると、これは天界に引っ張られる。例えて言えば、そういうようなわけです。案外、これが現実だろうと私は思っています。

●神の霊的な法則

16 **われら祈場に往く途中、卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女、われらに遇う。17 彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高き神の僕にて汝らに救の道を教うる者なり』18 幾日も斯くするをパウロ憂いて振反り、その霊に言う『イエス・キリストの名によりて汝に、この女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり。**

功利的な打算的な霊です。キリストがなさったと同じ事をキリストの御名にあって使徒たちは皆やった。だから、御名ということは大変なことです。クリスチャンの祈りで、「御名によりて」と最後に言うけれども、あれはつけたりではダメなんだ。「御名によりて」というのは一番力が入らないと。キリストの御名は実力を持っているから、いい加減な気持では言えない。

19 **然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるを見てパウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、20 之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて我らの町をいたく騒がし、21 我らロマ人たる者の受くまじく、行うまじき習慣を伝うるなり』22 群衆も齊しく起こり立ちたれば、上役ら命じて其の衣を剥ぎ、かつ笞にて打たしむ。23 多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。24 獄守この命令をうけて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。25 夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美するを囚人ら聞きいたるに、**

捕らえられても、パウロは――肉体は縛られても一向差し支えない――神さまを讃美しているんだ。

26 **俄に大いなる地震おこりて牢舎のもといふるい動き、その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縄めとけたり。**

それは現象としては地震でしょうよ。しかし、これは霊震、天震である。地震の現象は何によって起きたかというと、霊が震い動いた。

神さまの霊的な法則の世界は恐ろしい。殺人をしたような人は必ず報いがきます。これは霊的法則の世界だから。パウロもその報いにあずかった。けれども、彼はキリストに本当に打ち砕かれて、立ち上がったから、それは大きな赦しの中にいますけれども、パウロ

さんも多くの苦しみを受けなければならなかった。

アベルの血から世界の歴史の終りまで、殺人はケタ違いの悪い罪です。人間の世界というのは地獄の悪魔よりか悪いような事をする。大変なことです。だから、

「世界が段々進化して良くなって、そして最後に地上に平和がくる」

なんて、何を言っているか。そんな人間の工作で平和なんかこない。人間の罪はもっと深刻です。それは大きな審判に合うだけのものを持っている。ですから、聖書が言うとおり、大きなひっくり返りになる。

「この末の世には信を見んや」

と、キリストはちゃんと終末の世界を見ていらっしゃる。だから、もの凄いドラマです。そのドラマの歴史の中で私たちは、何がどうなっても、神の民として生きなければ。そして、どんな事があっても、神の国は必ず私たちの想像を絶する相(すがた)で与えられてくる。そうなると、地上の百年の生涯なんてものは問題じゃない。今から本当に永遠を生きている生き方をしなかったら、これは、

「空(くう)の空なり、凡(すべ)て空なり」

と、伝道者が言っているとおりです。つまらんですよ、本当に、それでは。

●救の霊震

27獄守(ひとやもり)、目さめ獄(ひとや)の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、28パウロ大声に呼ばわりて言う『みずから害(そこな)うな、我ら皆ここに在り』29獄守(ひとやもり)、燈火(ともしび)を求め、駆け入りて戦(おのの)きつつパウロとシラスとの前に平伏し、30之を連れ出して言う『君等(きみたち)よ、われ救われん為に何をなすべきか』31二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』32斯(かく)て神の言を獄守とその家に居る凡ての人々とに語れり。33この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、34かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。

何と素晴らしいことか。神を讃美して、本当に讃美する事態がそこに起きてしまった。敗北を知らない霊です。どんな事態になっても、窮すれば窮するほど、そこに天界が開けてくる。地の相対的現実に絶するところに、本当に無限の事態がそこに展開されてくる。行き詰まりを知らん。

「為(せ)んかた尽くれども望みを失わず、倒さるれども滅びず」

と、パウロが言った。クリスチャンほど熾んなる者はない。どんな事があっても、つぶやかない。どんな事があったって、ヘンてこな要求なんかしない。生活問題もヘッタクレもない。

そういう事態にぶつにかって、パウロと一緒に、自分たちがどのような困窮の事態に陥れられようとも、御名を讃美すると、力がくる。必ず天はこれに応えたもう。パウロとシラスの讃美に対して、天震をもって、霊震をもって応えたもう。この霊震には審判（さばき）の霊震と救の霊震がある。このパウロのは正に救の霊震です。悪い事をすれば、それは審判の霊震になる。

今は本当に真理の叫びがない。御言の飢饉ですから。あなた方は――私の叫びではない――聖書の中から叫び呻いているところの、この響きを受けとらなければ、聖書を読んでいるとはいえない。

もぅ、たまらんです、この聖書一巻は。聖書一巻の旅でいい。天国に往くときには、聖書一巻も持っていけない。天界に往くときには、魂が聖書をもうすっかり食らって、

「私は活ける聖書でござる。聖書は要りません」

というようなことでなくては。使徒行伝でもロマ書でも何でも、暗記してごらん。とにかく、何か、キチガイいみたくなってやったらいい。気違いというのは、普通の気とは違うということです。天の気になったということ。天的な気になったので、この気違いこそ素晴らしい。普通の気と同じでいたらしょうがない。

「天気晴朗にして波高し」

というけれども、本当の気違いは天気になる。「今日は天気がいい」なんてね。お天気はしょっちゅういい。天気は常に晴朗なんです。天の気、神さまの気は常に晴朗であります。この天気は相対的な空ではない。絶対界の天です。聖書の中でも天国という。神さまの他に天という。天というのは非常に素晴らしい言葉です。霊的絶対空間です。この部屋の中にも天がある。

「天にまします父よ」

というけれども――それは相対的にはちょっと上のような気がするけれども――本当の天は地と一つになっている。天地一如の天が本当の天です。

そういう霊震が、天震が起きた。これはペテロの場合も、そういうことが書いてあったでしょ。あの時も素晴らしい。鉄の鎖が解けてしまった。とにかく、使徒行伝の現実は凄い。使徒行伝の現実の前に本当に降参して、

「どうか、このような現実に入れてください」

と祈る。入りますよ。現象の奥の根源現実ならば、無条件に入れる。「無」というのは素晴らしい。無条件なんだ。私はそんなことを言うと、パッとその世界に入ってしまうものだから、異言が出そうになって困る。……何か空中に上がりそうだ。

これが第二次伝道における一つの驚くべきドラマチックな事態であります。これがピリピ伝道において起こった事柄です。だから、獄吏が回心してしまった。その家族も、みんなそれでもってひっくり返った。

●テサロニケ伝道

17章です。

1斯てアムピポリス及びアポロニヤを経てテサロニケに到る。此処にユダヤ人の会堂ありたれば、2パウロは例のごとく彼らの中に入り、三つの安息日にわたり、聖書に基きて論じ、かつ解き明して、3キリストの必ず苦難をうけ、死人の中より甦えるべきことを述べ『わが汝らに伝うる此のイエスはキリストなり』と証せり。

「甦えるべき」とは「どうしても甦る」ということです。

4その中のある人々および敬虔なる数多のギリシヤ人、また多くの重立ちたる女も信じてパウロとシラスとに従えり。5ここにユダヤ人ら嫉を起こして市の無頼者をかたらい、群衆を集めて町を騒がし、又ふたりを集民の前に曳き出さんとしてヤソンの家を囲みしが、6見出さざれば、ヤソンと数人の兄弟とを町司たちの前に曳ききたり呼ばわりて言う『天下を顛覆したる彼の者ども此処にまで来れるを、7ヤソン迎え入れたり。この曹輩は皆カイザルの詔勅にそむき他にイエスと云う王ありと言う』

即ち、「国事犯であるところの、このイエスを王者として、メシヤとして言っているが、とんでもないはなしだ」というわけです。

「天下を顛覆したる彼の者ども」

天下を覆すような大騒ぎをしたやつというわけです。そういうようなことを言って、彼らを誹謗したわけです。

●アテネ伝道

それから先は今度は、ベレヤからアテネに向かって行きます。16節から、アテネ伝道になる。大体、これが51年の夏と思われます。

16パウロ、アテネにて彼らを待ちおる間に、町に偶像の満ちたるを見て、その心に憤慨を懐く。17されば会堂にてはユダヤ人および敬虔なる人々と論じ、市場にては日々逢うところの者と論じたり。18斯てエピクロス派、並びにストア派の哲学者数人これと論じあい、或者らは言う『この囀る者なにを言わんとするか』或者らは言う『かれは異なる神々を伝うる者の如し』是はパウロがイエスと復活とを宣べたる故なり。

アテネは哲学好きの人たちがいる。普通の人たちもすぐ哲学の話をする。エピクロス派とは快楽派で、ストア派は道徳派の方です。

「ギリシアにはギリシアの神々があるのに別な神のことを言っている」と。

19 **遂にパウロをアレオパゴスに連れ往きて言う『なんじが語るこの新しき教の如何なるものなるを、我らの知り得べきか。** 20 **なんじ異なる事を我らの耳に入るるが故に、我らその何事たるを知らんと思うなり』**

まぁ、哲学者だから「一応聞こう」というわけだ。

21 **アテネ人も、彼処に住む旅人も、皆ただ新しき事を或は語り、あるいは聞きてのみ日を送りいたり。**

非常に知識欲が旺盛なんだ。

22 **パウロ、アレオパゴスの中に立ちて言う、**

『アテネ人よ、我すべての事に就きて汝らが神々を敬う心の篤きを見る。

ギリシアの神々も結構でしょう、と。

23 **われ汝らが拝むものを見つつ道を過ぐるほどに「知らざる神に」と記したる一つの祭壇を見出したり。然ば我なんじらが知らずして拝む所のものを汝らに示さん。**

「知らざる神に」とは「アグノストー　テオー」というギリシア語です。或いは「知らざる神々」と書いてあった。これは複数の方が本当でしょう。それをパウロが言うときには、単数で言ったのかも知れない。

●神の中に生き動きまた在る

24 **世界とその中のあらゆる物とを造り給いし神は、天地の主に在せば、手にて造れる宮に住み給わず。**

神殿なんて言って、大いに偶像なんか造ったってダメだ。その意味では無神殿、無教会というわけだ。

25 **みずから凡ての人に生命と息と万の物とを与え給えば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事うることを要し給わず。** 26 **一人よりして諸種の国人を造りいだし、之を地の全面に住ましめ、時期の限りと住居の界とを定め給えり。**

27 **これ人をして神を尋ねしめ、あるいは探りて見出す事あらしめん為なり。されど神は我等おのおのを離れ給うこと遠からず、** 28 **我らは神の中に生き、動きまた在るなり。汝らの詩人の中の或者どもも「我らは又その裔なり」と云える如し。** 29 **かく神の裔なれば、神を銀・金・石など人の工と思考とにて刻める物と等しく思うべきにあらず。** 30 **神はかかる無知の時代を見過ごしに為給いしが、今は何処にても凡ての人に悔改むべきことを告げたもう。**

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」

という句は非常に大事な句です。これは次の聖句と相類似するところの事態であります。

36 **「これ凡ての物は神より出で神によりて成り、神に帰すればなり、栄光とこ**

しえに神にあれ、アァメン。」（ロマ11・36）

「6我らには父なる神あるのみ、万物これより出で、我らも亦これに帰す。また唯一の主イエス・キリストあるのみ、万物これに由り、我らも亦これに由れり。」（コリント前8・6）

「28万の物が服うときは、子も亦みずから万の物を己に服わせ給いし者に服わん。これ神は万の物に於て万の事となり給わん為なり。」（コリント前15・28）

「16万の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、あるいは位、あるいは支配、あるいは政治、あるいは権威、みな彼によりて造られ、彼のために造られたればなり。17彼は万の物より先にあり、万の物は彼によりて保つことを得るなり。」（コロサイ1・16～17）

「我らは神の中に生き、動きまた在るなり」

この句はゲーテが非常に好きな句であって、彼は詩の上でも、また『エッカーマンとの対話』の中でも、時々この言葉を出してます。ゲーテという人は、

「神・自然・我」（ゴット・ナトゥール・イッヒ）

が一如のような角度でもって、彼の魂は生きていた。なぜゲーテが偉大かというと、やっぱりそういう、限界を知らないところの、無限無量の事態に彼の魂は生きていたからです。だから、ゲーテ研究家がいくら研究したってダメなんだ、そこのところに本当に気が付いてこなければ。それは頭の上では気が付いていますよ。けれども、本当にその境地に入らなければ、ゲーテなんていうのは掴めない。ところが、私みたいな者がゲーテを掴んでしまうんだから。

●キリストの中に生き動き在る

「神の中に生き動きまた在る」

という。私たちは

「キリストの中に生き動きまた在る」

「キリストの中に」と、これが本当にならなければ。

「我が生くるはキリストなり」

と。「我れにとりては」というのは「我が生くるは」でもいい。或いは

「我が生命はキリストなり」

でもいい。

「我れはキリストを生く」

でもいい。とにかく、

「キリストの中に生き動き在る」

ということ。そういうと、人はすぐ

「その人の行状が果たしてそれほど正しいか」

なんて、そういう見方をする。そうじゃない。人間は破れなんです。我々はパラダイス・ロストです。破れの中にキリストがやって来て、御霊がやって来て、生き動き在る。

破れだから、これは整っていない。ところが、他方には、破れていない何か立派なものがある。真四角で非常に謹厳なんだ。また、まことに円満であるかのようなんだ。ルカ伝15章の放蕩息子は破れだ。けれども、お父さんと一緒にやっていた兄の方は整っている方だ。整っている方は人間が造った造花みたいで立派なんだ。

「ひょっとすると、あれは本ものか」

と思われるくらいに立派にできている。けれども、それには生命が通っていない。造花はどんなに素晴らしくても、生命が通っていない。破れは野草の方で、ひょっとすると毛虫が付いているかも知れない。毛虫に食われるような生きたものです。

破れていてもこれは本当に、

「キリストにおいて生き動き在る」

んです。人間は生まれつきいろいろな性格がある。癖があったり、欠点があったり。けれども、

「あれは本当に生きているな。あそこには本当に生命があるな。本当の喜びがあるな」

というのがこれなんです。整っている方は非常に立派なんだけれども、何か冷たい。近寄りがたい。

「キリストの中に生き動きまた在る」

というのはこの姿です。そういうように神さまは、上辺や形式や良さそうな判断でご覧にならない。その人の魂が本当に神に生きているか、キリストに本当に平伏しているか、そこに生きているか、というところで見る。これが

「神の中に生き動きまた在るなり」

ということです。キリストの中に生き動きまた在るのが、私たちが本当にクリスチャンであるということなんです。そうでなかったら、そんなのはレッテル・クリスチャンです。レッテル・クリスチャンがたくさんいる。本ものが欲しいわけです。

パウロは演説して「知らざる神に」と言うけれども、本当は神さまは、こっちから知るのではない、知らしめられる。神に動かされキリストに動かされてくると、はっきりとそのことが分かってくる。

●焼けくそ信仰

「神が在るの無いの」

とか、

「一神論の、多神論の」

なんていう論の世界ではない。たとえ一神論で結論が出たって、そんな神さまはひとつも救ってくれない。本当の神さまは無きが如き神です。

「一体、神さまは在るのだろうか。こんな矛盾だらけの不公平だらけの世の中を放ったらかしで見ている神さまは」

なんて、大体、普通の人はそれで神を信じないわけです。

「不公平じゃないか。どうして、こんなことに放ったらかしているのか。神さまが在るというなら、もう少し何とかしたら良さそうなものだ」

なんて。無きが如き神ですよ。あきれ果てたるが如き神です。もう、地上は訳けが分からん。ヤケクソ信仰である。けれども、単なる焼けくそではない。我々に訳けが分かるような神さまは本当の神さまではありません。

「不合理なるが故に我れ信ず」（テルトゥリアヌスAC2～AC3の言葉）

という言葉があるが、訳けが分からんから、

「どうして俺はひとつも面白くない運命になってしまったんだろうか」

なんて、いい加減焼けくそになって、酒なんか飲む。

「訳けが分からないから、不公平だから」

と。また逆に、

「そうでないから、いや、分かるから」

なんていって、人間の側からの判断でもって信ずるようなことであったら、まだ本当の神さまを信じているわけではない。

「どんな事にでっくわしても、どんな現象になっても、なお神は在る。我々に分からないからこそ、それが故に神さまは神さまなんだ。分かるような神さまだったら、私と大して変わりない。ケタが違う、次元が違う。そういう神さまだからうれしいなぁ」

と言って信じていく。そういう、混沌たる、また不合理なる、その中でもってなお神を信じている、その人には神の霊が来ている。その人は神につかまれている。実はそこに神が在るんです。どんな事があっても、ヘコたれない。そこに神さまの実力がきている。だから、外側から判断したり、結論したり、情勢をみたり、人を見たり、そんなことでもって判断している限りは、絶対に本当の信仰にこない。

キリストは、そのようにして神を信じぬいた。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまえり。なぜ、私をお棄てなさるか」

と、こう言ったキリスト。

「あの叫びがあったからこそ神があった」

と私は逆説的に言いたい。本当にこれは図太い信仰ですよ。どんな事があったって、動か

ない。全然、不動です。そして、一切を包んでしまう。

●ザ・ドラマ

これが

「天地正大の気」

とでもいうものです。発すれば、もの凄い嵐ともなる。嵐がくれば、いろんな現象が起きて、それはお気の毒ですよね。けれども、大自然の動きというものは、そこには本当に神の業が、何か知らんけれども、大きく動いている。だから、人間はそれに順応していかなければ。嵐を見れば嵐となり、無風をみれば無風体となり、木を見れば木となり、花をみれば花となる。鳥をみれば鳥となる。

私は本当にそういう気持をもっています。私の本質は分からんね、正直。

「人間小池というのはどういう者だ」

なんて書けない。無くなってしまったんだ、何も無い、そういう事態です。ところが、何も無いと、どっこい、そこに在るものは、神の事態がやってくる。ありがたい。一切のものを本当の生命の世界に、本当の喜びの世界に、本当の救の世界に入れようとするところの、どんな事があってもへこたれないところの事態です。しかしながら、現実に対しては、深刻な悲しみと憂いを持つ本当の涙の人。万斛（ばんこく）の涙を持っていると共に、ベートーヴェンやバッハもかなわないような大交響楽を、讃美を持っている。そういうことが、

「神の中に、キリストの中に生き動きまた在る」

ということです。

聖書を読んで、素晴らしい句がきたら、瞑想しなさいよ。瞑想して、その文字は血となり肉となる。化体してしまう。そして、大事な句は本当に消化してしまう。そうしたら、もう聖書はなくてもいい、活ける不立文字となってしまうから。

聖書は「ザ・ドラマ」、劇中の劇、救をもたらすところの驚くべき劇です。その点で、使徒行伝は凄い。もちろん、福音書は最高です。何といっても、キリストの現実は、福音書は聖書のアルファでオメガです。

31 **さきに立て給いし一人によりて義をもて世界を審かんために日をさだめ、彼を死人の中より甦えらせて保証を万人に与え給えり』**

32 **人々、死人の復活をききて、或者は嘲笑（あざわら）いしが、或者は『われら復（また）この事を汝に聞かん』と言えり。** 33 **ここにパウロ人々のなかを出で去る。** 34 **されど彼に付随（つきしたが）いて信じたるものも数人あり。其の中にアレオパゴスの裁判人デオヌシオ及びダマリスと名づくる女あり、尚その他にもありき。**

と、非常に詳しく書いてある。これでアテネ伝道はおしまい。

●コリント伝道・エペソ伝道

今度は、コリントです。18章です。

1この後パウロ、アテネを離れてコリントに到り、2アクラと云うポントに生まれたるユダヤ人に遇う。クラウデオ、ユダヤ人にことごとくロマを退くべき命を下したるによりて、近頃その妻プリスキラと共にイタリヤより来りし者なり。

大体、これが51年の秋から53年の春頃までいた。

3パウロ其の許に到りしに、同業なりしかば偕に居りて工(わざ)をなせり。彼らの業は幕屋製造なり。4斯て安息日毎に会堂にて論じ、ユダヤ人とギリシヤ人とを勧む。

5シラスとテモテとマケドニヤより来りて後はパウロ専ら御言を宣ぶることに力(つと)め、イエスのキリストたることをユダヤ人に証せり。6然るに、彼ら之に逆い、かつ罵(あなど)りたれば、パウロ衣を払いて言う『なんじらの血は汝らの首(かしら)に帰すべし、我は潔よし、今より異邦人に往かん』

今でも、ユダヤ人はそうなんだ。パウロみたいな、今の普通のユダヤ人よりか遙かにもの凄いパリサイ人がひっくり返ったんだからね。どうして、これをユダヤ人が認めないかと思う。こればかりは不思議だ。パリサイの、ユダヤ人中のユダヤ人のチャンピョンが、活けるキリストにひっくり返された。そうすると、ユダヤ人は

「パウロは間違った」

なんて言う。何をか言わん。

「なんじらの血は汝らの首(かしら)に帰すべし」

という言葉はエレミヤ記の中にも出てきます。

7遂に此処を去りて神を敬うテテオ・ユストと云う人の家に到る。この家は会堂に隣れり。8会堂司クリスポその家族一同と共に主を信じ、また多くのコリント人も聴きて信じ、かつバプテスマを受けたり。

これは水のバプテスマではなく、霊のバプテスマです。

9主は夜まぼろしの中にパウロに言い給う『おそるな、語れ、黙すな、10我なんじと偕にあり、誰をも汝を攻めて害(そこな)う者なからん。此の町には多くの我が民あり』11斯てパウロ一年六个月(かげつ)ここに留まりて神の言を教えたり。

そこでパウロは一年半もそこにいた。そして伝道をした。コリント書簡は後で書きます。コリントはいろいろな問題もあったから、コリント書簡では、ほとんど人間のいろいろな問題がそこに全部集約して出てくる、非常に大事な具体的な内容をもったところの書簡です。「コリント」というのは或る一つの悪い代名詞になっている。

18パウロなお久しく留まりてのち、兄弟たちに別れを告げ、プリスキラと

アクラを伴い、シリヤに向かいて船出す。早くより誓願ありたれば、ケンクレヤにて髪を剃れり。19斯てエペソに著き、其処にこの二人を留めおき、自らは会堂に入りてユダヤ人と論ず。20人々かれに今暫く居らんことを請いたれど、肯(がえ)んせずして、21別れをつげ『神の御意ならば復(また)なんじらに返らん』と言いてエペソより船出し、22カイザリヤにつき、而してエルサレムに上り、教会の安否を問いてアンテオケに下り、

22節までが第二次伝道のことになる。それだけの大伝道をパウロはしました。ギリシアに向かって、ピリピ、テサロニケ、アテネ、コリント、エペソと、ギリシアに初めて福音が伝わった。

●十字架と聖霊と復活

それで、私たちは一応、第二次伝道のお話は終わるわけですが、今お話した中で特に注目して頂きたいことは、

「我らは神の中に生き動きまた在る」

という一句です。パウロは、「神」と言っても必ず「キリスト」、「キリスト」と言っても必ず「御霊」――「三位一体」なんてことをただ神学的に言うのではない――

「神とキリストと聖霊」

はパウロにおいてはいつも一つなんです。私たちが例えば、「主さま」と祈っても、そこには「父なる神」がある。また、聖霊が来ている。「聖霊」と言いましても「キリスト」です。「神とキリストと聖霊」というものがパウロにおいては本当に渾然(こんぜん)としています。それを、いわゆる平面論理の神学でもっていくら論じたって、そんなことはむしろ徒労なんです。体験的に本当にこの三者が一つになる。しかも、我々に一番身近にきているのは御霊です。御霊が本当に内住しなければ、「キリスト」と言っても、これは或る意味においては観念になってしまう。或いは、ただ人間的にただキリストと思っているだけ。だから、キリストが本当に具体的に、イエス・キリストが本当に活けるキリストとして感ぜられるためには、絶対に御霊が来てなければダメです。その御霊が本当に内住するためには、その土台となっているものは、キリストの十字架なんです。

「神・キリスト・聖霊」と

「十字架と聖霊と復活」

この「キリスト」というのは復活のキリストですから。この事態は本当に血となり肉となっていなければ、信仰は本ものでない。どんなに、イエスが弟子たちと親しくあっても、地上においては、弟子たちには聖霊は来なかった。一時的には聖霊の働きはありましたよ。けれども、聖霊は内住できなかった。なぜ、内住できなかったか。これは、罪の贖いがなされていないから。十字架に於けるところの罪の贖いがなされてないから、聖霊が内住し

ない。これはペテロがはっきりとその事を証明している。ペテロは本当に端的にキリストを受けた。だから、或る時は、

「**あなたは神の子である**」

と告白したら、

「**汝にそれを示したのは肉ではなくて、天の父である**」

といってキリストは誉めた。そして、

「**お前の上に教会を建てる**」

とおっしゃった。あれは後から付け加えた言葉だと言われていますけれども。とにかくしかし、ペテロは或る時は、波の上を渡っていったでしょ。ところが、また沈みかけた。そういうような事態であって、聖霊はどうしても内住できない。ヨハネはキリストの胸に寄っているような親しい弟子だったけれども、ヨハネでもダメです。ヤコブもダメ。ゲッセマネの祈りの時に彼等は眠っているんだ。変貌の山でも、あの三人はやっぱり居た。それでも、びっくりして、とんでもなくあわてたことを言っている。

●奥の現実

それでありますので、我々の信仰に於ては十字架の贖い、罪の贖いが本当に土台である。罪の贖いが土台であるということは、我々が、この自我というやつからすっ飛ばされているということです。根源的に自我からすっ飛ばされている。相対的な現実は、私たちはすっ飛ばされていませんよ。しかし、もうひとつ奥の現実を言っているんだ。この相対的な現実の奥の現実です。この奥の現実では、完全に罪から贖われて、これは完了している。いつも、現在完了している。であるから、

「主さま！」

と叫べば、聖霊は入ってくる。十字架はそれだけ土台ですから。

「**我れキリストと共に十字架せられたり。もはや、我れ生くるにあらず**」

と、パウロがそういう表現をしたのは、そのことです。

「**もはや、我れ生くるにあらず**」

というのは、

「自我は生きていない。自我は根源的にはもうすっ飛ばされている」

ということ。我々のこの自我という罪は根源的にすっ飛ばされている。

法然も、

「何とかして菩薩の境地に入りたい。けれども、どうしても曇ってしょうがない。煩悩から脱したい。けれども、どうしても影があってしょうがない。もうどうにもらん。南無阿弥陀仏の他にない」

というわけでしょ。南無阿弥陀仏という称名によって、絶対の恵みの世界に、大慈大悲の

世界に入るというんでしょ。ところが、キリストの場合は、

「私は十字架でもって、自我という煩悩の世界からお前をすっ飛ばしてしまった。私はお前を全部引き受けてしまった。そうしたら、私はその中に入って、今度は、聖霊が灯る。御霊の光がさしてくるぞ」

ということです。この自我には影があったが、影がなくなってしまう。ここは光だから。ローソクそれ自身は影をもたない。光が来たから、影はなくなってしまった。光がくるまでは、影はどうしてもあるわけです。これは外から光が来たってダメなんだ。それでは影がある。けれども、内側に光が来たら、影がなくなってしまう。太陽に影がありますか。地球は光をもたないから、影がある。お天道さんは影がない。

「心に太陽をもて」

という。私たちが本当に内に聖霊を頂くと、相対的な我々は影をもっているけれども、恩寵の現実、信仰の現実においては影はないんです。これが御霊の世界です。

●矛盾構造

もちろん、現実の我々は矛盾構造ですよ。罪びとにして且つ義人である。影は有って、無い。無くて、有る。けれども、恩寵の世界では、一番根源的な意味においては、影はないんです。相対的現実に於いても、本当に生まの現実で影が無くなるのは、天界に行ってからのはなしです。今の現実に於いて、私たちは「影あれどもなし」という世界を頂いている。これが恩寵の世界です。そうでしょ。

「手離しで影が無い」

なんていうことは有りはしない。キリストだって、地上にある限りは、その危機の中にいらっしゃった。だから、いつも、

「あなたの御意がなりますように」

と祈っている。

「もう私は影のない人だから」

といって、キリストはノホホンと生きてましたか。そうじゃないでしょ。いつも平伏して、

「神さま！」

と言っている。そして、何よりも彼は祈りのひとであった。即ち、祈りにおいていつも神さまの光を頂いていた。御意を頂いていた。それが現実に力となって、言葉と現れ、手足の不思議な業となって現れている。これはみんな、キリストがやっているのではなく、

「神さまがしているんだ」

と、キリストがおっしゃったではないですか。

「私は何もできない」

と言ったではないですか。

「神さまがせよと言っていることを働いているだけのはなしだ、言えと言うことを言っているだけのはなしだ」

と。だから、私はキリストのことを

「無者」

と言う。

「無者即無限無量者」

と言う。私たちはキリストにあって本当に、即、その世界に質的には入っている。三日月でも満月の質をもっている三日月であります。だから、そのようにして、我らは御霊が宿ることにおいて、

「キリストの中に、聖霊にあって生き動きまた在る」

んです。御霊はいかにして宿るかは、十字架の故に宿る。だから、御霊は他の霊とは切り替わらない。十字架が無かったら、ヘタすると切り替わりますよ。

「俺は霊的になってきた」

なんて、いい気になっていたら、これはサタンになる、傲慢になる。イエス・キリストがサタンと戦った時には、どうですか。彼は自分の霊力で戦いましたか。そうじゃないでしょ。

「お前は崖から落ちてみろ、天使が救うと詩篇に書いてあるではないか」

と、サタンが言った。

「神さまを試みてはいかん。神さまの御意でないことをして、とんでもないはなしだ」

と言って、いつも神の御意を求めている。聖意体現、神さまの御意が身体を通して現ずる、という。聖意体現がキリストの在り方なんです。本当に神の前に平伏しておられた。

「では、私の前に平伏せば、全世界をやるよ」

とサタンが言いやがったから、

「サタンよ、退け。ただ神のみを拝せよ」

とキリストはおっしゃっている。経済問題、政治問題、宗教問題でサタンはかかってきたが、どれに対しても、キリストは神に於いて勝ちたもうた。自分が勝ったのではない。

我らはキリストのうちに生き動きまた在る。十字架の故に、御霊の故にですよ。

「十字架の故に、御霊の故に、我らはキリストのうちに生き動きまた在る」

それは、いついかなる所におきましても、瞬間的にその世界に入らなくては。パッと入れる。パッと入れるとはどういうことですか。十字架であがなわれているではないですか。それにハタと気が付くんです。とたんに、聖霊が来ているのです。それは本当に即の世界です。そういう中に入ると、何かしらんけれども、本当に楽な人になる。そして、もう、力が溢れてしょうがない。そうしたならば、困っている人、苦しんでいる人、求めている人があったら、すぐそれに向かって、これを分け与えなければ。分け与えると言ったって、何%か

ではない、全体をです。自分自身をそこに本当に持っていくわけです。

●御霊の愛

これが本当に御霊の愛なんです。だから、愛は力強い。

「愛は一切に勝つ」

という。「勝つ」というのは「救う」ということです。一切を救い上げる。お釈迦さんもキリストも地上済度です。なぜ、お釈迦さんやキリストが歴史のおわりまで存在するかというと、大慈大悲の力が、愛の力が何よりも強いからです。ということは、生命を与え救う力であるからです。倒す力ではないから、自己主張する力ではないから、そこらの力とおよそ力の質が違う。そこらの力は皆サタンの力です。これは滅びていく力です。みずからを亡ぼす力で、結局自分を亡ぼす。英雄の末路はみなそのとおり。

ナポレオンはいくら力があったってダメなんだ。ナポレオンもセントヘレナで最後に言ったではないですか。ヨーロッパを席巻したけれども、最後にはキリストに降参した。

「福音書は神秘的な力をもっている。それは名状しがたきところの作用力をもっている。また、もの凄い熱さをもっている。福音書は本ではなかった。これは活きている或る一つの存在であった。それは驚くべき作用力をもったところの存在であった。これに立ち向かう一切のものを引きさらってしまうような力を持っている。キリストは愛の炎を灯しておられる。それによって何よりも強いところの自己愛をその愛の力でもって破っていく」

と。さすがはナポレオンです。そういうことが彼は読めてきた。そして、福音書の前に降参した。即ち、キリストの前に降参した。

何といっても、イエスにはかなわない。神の愛の力が、救済の力が、これが十字架において私たちを本当に贖いとってくださった。だから今度は、聖霊を与えて、本当の永遠の生命にしてしまう。死んでも死なないような生命を与えて、

「この生命を人に与えてくれ、本当に人を活かしてくれよ」

と。それはキリストが、

「我よりも大いなる業（わざ）をなさん」

とおっしゃったのはそのことです。

「地の極（はて）まで世の末までも、私はお前たちを通してこの世を救っていこうと思う」

と。それを受けとらない者は仕方がないよ、自分で地獄へ往くよりか。審判（さばき）なんて、キリストは裁こうなんて思ってやしない。みずから審判を招いているだけのはなしだ。キリストは絶対恩寵の赦しの方である、救の方である。それならなぜ、審判があるか。それは、自分で審判を招いてしまっている。神さまを無みし、キリストを無みしていれば、世界の歴史はこのままでいったら、結局、自分でもって自己破滅に陥っていく。これは明々白々

たることです。もう一遍、仏教であっても、キリスト教であっても――私は何々教なんてことを言っているのではない――絶対者の前に本当に平伏せば、この救の世界に入っていく。それが本当に偽りでない世界であるならば、お釈迦さんの世界でもいいです。我々は、しかし、キリストに捕まえられたから、キリストでいく。そうかといって、決して、他をどうのこうのと言っているのではない。キリストは、善きものは一切認めていくところの、そして、本当に大きく宇宙的に一切を包摂するものを持っているから。イエスはそのような、

「神さまは、悪しき者にも善き者にも、雨を降らせ、直き者にも直からざる者にも、陽を照らす。汝ら、父の全きが如く全かれ」

とおっしゃったことは、

「一視同仁に、一切のものに雨を降らせ、陽を与えるように、私の雨、私の陽、即ち聖霊は陽ともなり水ともなる。ある時は水に例えられ、ある時には火に例えられる。この聖霊は一切のものを救い上げていくではないか、それが父の如くということだ」

というんです。

「汝ら、父の如くあれ」

という最大の要求をなさったのは、

「聖霊がくれば、その質が出てくるぞ」

ということなんです。キリストはなぜ水を割らないかというと、

「水を割らないもの凄いものを与えるから、お前たちはそのようになっていく」

ということ。そういう質が来るんです。だから、

「生まれつきの我々がどうのこうの」

なんていう、そんな話ではない。

神さまは、本当にそのようにして私たちを、キリストの霊をもって満たして、

「本当にお前たちは新しき第三の人類としてこの20世紀の危機を突破してゆけ」

というわけです。

●祈り

祈ります。

神さま。この集会に来れなかった兄弟姉妹たちがいます。彼らを本当に気の毒に思います。どうか、憐れんでやってください。また、先に帰った者もいます。どうぞ、その魂を顧みてやってください。

主さま。私たちが本当に欲しいのはあなただけです。

「あなたの中に生き動きまた在る」

という、この事態は、御霊の故に、十字架の贖いの故に、私たちはその中にあります。

「ああ、この生命をいかんせん、この光をいかんせん、この愛をいかんせん」と言って進んでいきたく存じます。もはや何の隔てもありません。いかなる人に向かっても、ただあなたを証し、あなたを与えるばかりです。

神さま。イエス・キリストはその為にやって来ました。その為に十字架に架かり、その為に天界に昇り、その為に聖霊を与えてくださいました。私たちは今、この驚くべき福音を私たちの全存在をもって受けとり、二千年前のパウロ、ヨハネ、ペテロの使徒行伝のこの現実を本当に質的に受けとって、第二の使徒行伝を進めたく存じております。どうぞ、この兄弟姉妹たちをそのような使徒的信仰の人物として、いよいよ鍛え、いよいよ顧み、いよいよ包んでください。

主さま。

「我れなんじのうちに、なんじ我がうちに」

と、いつもそのようにして、ハタと気が付き、

「気が付いてみたら本当にあなたと一つでした」

と、そのことを本当に私たちの現実にさせてください。

主イエス・キリストの救の力は一切の例外はありません。いかなる病も、いかなる事態も、全部救い上げてくださるこの驚くべき事態を受けとらせてください。主さま、切にお願いいたします。どうぞ、そのようにして、兄弟姉妹たちのうちに来てください。私たちはそれでなければ、この20世紀を貫いていくことはできません。……

はい、黙祷。深く深呼吸してください。御霊を吸う。

「わが活くるはキリストなり。キリストと共に十字架せられたり。われ生く、されど我れにあらず、キリストわがうちにありて生きたもうなり」

アーメン。御名を讃えまつります。